

「教育実習を振り返って」

[公立中学校 国語]

3週間にわたる教育実習は私にとって特別な思い出になった。大学の講義やボランティアなどでは得ることができない貴重な経験をする事ができたと感じる。

まず授業に関しては、50分間すべての時間、一人で教壇に立ち授業をするということに全く慣れておらず、授業内容の準備はもちろん、板書や時間配分など難しいと感じることが多くあった。私が実習に行っていた中学校では、ICTの設備が整っていて、先生の多くがICTを活用した授業を行っていた。しかし、私は指導教員の方の「ICTに慣れることも必要だが、まず基本の板書ができないといけない。」という指導により、主に黒板に板書をするという授業スタイルで行った。黒板にチョークで文字を書くというのも、自分自身が思っているより難しく、文字の大きさや書き順など多くのことを意識し、実習期間では板書練習もたくさんした。大阪では自治体によりICTの設置状況が変わるので、教育実習という期間の中で基本の板書を練習することができて良かったと感じた。将来自分が教員として働く際は、その学校の設備に合わせてながら、ICTと板書の使い分けをうまくしていきたい。

そして授業をしていく中で、国語の知識だけでなく日常生活・社会生活の中の幅広い知識が必要だと感じた。指導教員の方の授業や、他の先生方の授業見学の際に、自分自身との知識量の差を痛感した。経験、知識共に私はまだまだ足りないと感じたので、残りの大学生活の中で、国語の知識はもちろん、教科に関わらず知識を蓄えていこうと思う。知識が少ない状態で授業をするのは不安も多くなってしまうので、常に勉強を続ける向上心を持ち、自分の知識の引き出しをたくさん作ろうと考える。そして国語という教科の勉強を、幅広い視点から考えることができ、おもしろいと感じてもらえるものにしていきたい。

生徒との関わりにおいては、まず名前を覚えることを重点的に努力した。そして声を掛ける時には、まず名前を呼ぶことを意識した。名前を覚えることで授業の中でもスムーズに進行することができるので大切なことだと実感した。

そして生徒とは授業の中だけでなく、休み時間や放課後、給食の時間や朝と帰りのSHRの時間など、学校に生徒がいる時間はすべての時間でコミュニケーションを取るチャンスがあるということを実感した。はじめは、どのように話しかけたらいいのか、何を話せばいいのかが分からず、つい受け身になってしまっていた時があった。しかし、生徒と少しずつ関わる中で、生徒たちは話しかけてほしいと思っていることに気づき、どんな些細なことでもいいのでまずは自分から積極的に話しかけるということ意識した。些細な会話を続けることで、会話が広がり、趣味や部活や勉強などの話をできるようになった。教育実習に行くまでは、生徒とのコミュニケーションは簡単なものだと思っていたが、実際にやってみると難しいことも多くあった。どんな生徒とも平等に接するために、自分の積極性は常に意識しなければいけないと感じた。3週間という短い期間で、生徒との信頼関係を築くのは難しかったが、実習が終わりに近づくにつれて、寂しがってくれる生徒の存在や、「まだ授業を受

けたかった。」「楽しかった。」という生徒の言葉から、良い関係を築けたのではないかと実感することができた。最終日に HR クラスの生徒達からの言葉やアルバム、他クラスの生徒たちからの色紙や手紙をもらい、その内容に「授業がわかりやすかったし、面白かった。」「本当に私たちの先生になってほしい。」という言葉があった。授業では大変なことや不安が多く、自信を持って授業ができたことは少なかったが、生徒たちからの言葉で授業にも私自身にも自信を持つことができた。教育実習は慣れない環境で、つらいと思ったこともあったが、生徒たちに何度も助けられ、毎日元気をもらっていた。教育実習が終わった後、心の底から楽しかった、一生の思い出になった、と思えるのは、間違いなく生徒たちのおかげだと感じる。

どれだけ勉強や想像をしても、実際の現場での経験には敵わないと感じた。この実習での素晴らしい経験を、今後の教員生活にいかしていこうと考える。